

神聖かつ荘厳な姿の富士山は、見る者誰も心打たれるものがある。その思いから有史以来この山が山頂への登拝や山麓の霊地への巡礼の対象として崇められてきた。この信仰の中から富士講と呼ばれる民間信仰が生まれた。富士講がどのような形で誕生し変遷してきたのかをたどってみたい。

## 1. 富士の存在

富士山は日本人の心の中にある象徴的存在。江戸の庶民ならず日本各地の人々にとって朝夕拝む富士の姿は神聖なものであった。

\*ケンペル『江戸参府旅行日記』に「富士は世界中で一番美しい山と言うのは当然である」記す。

\*オールコック(『大君の都』幕末日本滞在記より)

晴れた夏の夕方には、八〇マイルほど離れた江戸からも見えることがある。雲の上にその頭を高くもちあげており、夕日が背後に沈むので、その深紅色の大きなかたちが金色のついたての上にすっぽり浮き出しになって見える。また早朝には、朝日の光が頂上の雪に反射して、その円錐形が輝いて見える。

\*ヒュースケン『ヒュースケン日本日記』青木枝朗訳、岩波文庫)

なにに譬(たと)えようもない富士ヤマのすっきりとした稜線が左右の均斉を保って空高くそびえたち、薄墨いろにかげる青い山肌の上方には清浄な白雲がまるでコイヌール(大きなダイヤモンド)のように夕陽にきらめいている。

## 2. 「富士」「浅間(せんげん)」と呼ばれるようになったのか

### 浅間と富士の違い

「アサマ」の語源については諸説あるが、長野の浅間山のように火山を意味するとされる。「あさま」は古称で、「せんげん」は中世以降から用いられたとされる。

・アサマ...マレー語をはじめとする南方系言語では煙や湯気を「アサ」「アサブ」と言う。

日本には火山や温泉地にこれに似た地名が多い。

(山)阿蘇山、浅間山(温泉)大分 - 浅見、青森 - 浅虫、静岡 - 熱海、福島 - 温海、秋田 - 浅見内

### なぜ「フジ」と呼ばれるようになったのか

推測の域を出ないが、フジの名がつく前はアサマと呼ばれていたのではないか？

アイヌ語説...「フシ」=噴出する、裂けるの意。

マレー語説...「フジ」=素晴らしい

不死山説...『竹取物語』の不老不死の薬をフジ山頂で焼いてしまったという話

フクジ説...平田篤胤はフジとは福茲、富久土であり、天高くそびえたつ意味とした。

その他、すり鉢を伏せた「フセ」、「不二」...二つとない、「不尽」...永遠、「福慈」など諸説ある。

\* 信濃の浅間山以外に「浅間山」と呼ぶ山が、長野6、静岡5、三重6、群馬3、千葉3、神奈川2存在。

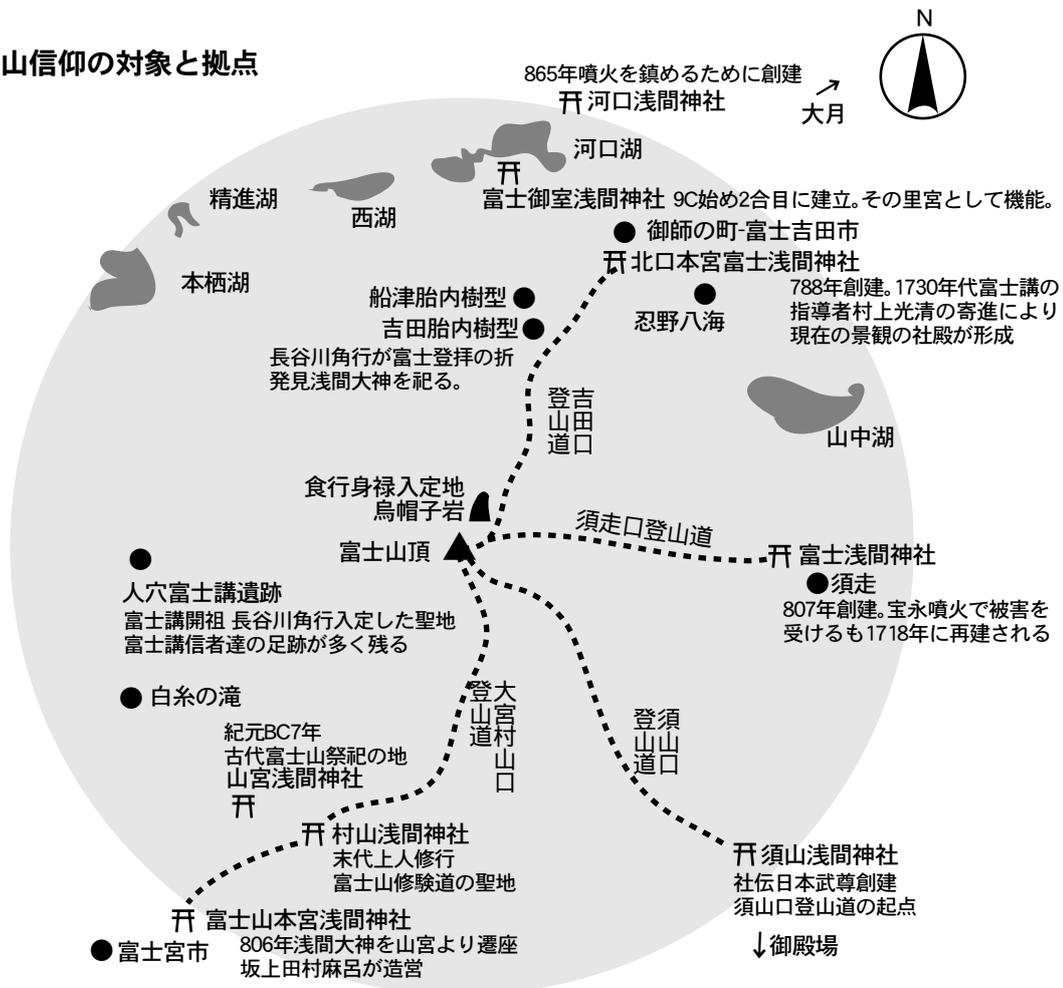
### 浅間神社

浅間神社は、富士山の神霊である浅間大神を祀る神社である。東海、関東を中心として全国に1316社が分布。荒ぶる神アサマ(富士)が爆発するのを鎮めようとしたことに始まる。

千葉257社、埼玉185社、静岡150社(内、大社102社)

浅間神社の総本宮・富士山本宮浅間大社は大同元年(806年)に山宮浅間神社から現在地に遷座したという。当地には式内社・富知神社が鎮座し、湧玉池を祭祀していた。この遷座は富士信仰が水の神たる「フクチ・フジ」信仰から火の神たる「アサマ」信仰へ転換したことを表す出来事だと解されている。

### 3.富士山信仰の対象と拠点



#### 富士に抱く思い...山岳信仰へのつながり

古くは神道においては、森羅万象に命や神霊が宿るとして、神奈備(かむなび)や磐座(いわくら)を信仰の対象としたが、それらを含む山岳信仰と仏教が習合し、さらには密教などの要素も加味されて確立した日本独特の宗教が、修験道である。修験道は神仏習合の信仰であり、日本の神と仏教の仏(如来・菩薩・明王)がともに祀られる。

#### 4. 富士への登山

##### ●最も早い富士登山者-役行者

7世紀の終わり、修験道の祖と言われる役行者(えんのぎょうじゃ)=役小角(えんのおづの)大和の国葛上郡に生まれ神仏両道に涉り行を積み極め、日本の名山・高山を開山し修験道の祖と呼ばれる。

##### ●富士山頂の様子を記した貴族-都良香

著書『富士山記』に登った者でなければ書けない富士山頂の実情に近い描写を記す。

##### 富士修験道の祖-末代上人

駿河の人。幼い頃から走湯山で苦行を重ね、各地の霊山を巡歴する。修行僧として村山に寺(興法寺の前身)を建立、1149年に富士山頂に大日寺を建立する。富士に登ること数百度、即身仏となり富士山の守護神とされる。

##### ●富士講の祖-長谷川角行

長崎の人。水戸で修験の道に入り、神告を受け富士に修行の場を求め人穴に住み洞中に四尺五寸の角材を立て、その上に爪先立ちで千日の行を行った。以後角行と名乗る。フセギという守札を書き、御身抜という独特の文字を持って書いた軸を信徒に与え、病気災難を逃れるという呪術を行とした。

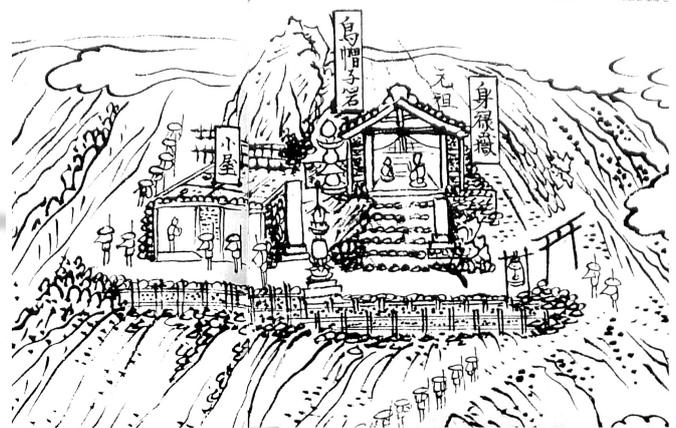
死後、弟子たちは江戸に移り、角行を元祖とする富士信仰が江戸の地に根を下ろす。

## 5.富士講のはじまり

### ●大名光清－乞食身祿

将軍吉宗治世の頃、角行直系6世・村上光清(小伝馬町・葛籠問屋主人)は人望もあり大名や豪商の代参を頼まれ、後年北口富士浅間神社社殿の改築に尽力した。浅間神社の大門を入ると、参道の両側の間に左右隙間なく石灯笼が建ち並んでいる。享保20年(1735)から元文5年(1740)の庚申縁年を挟んで宝暦6年(1756)まで、村上光清が中心となり「村上光清同行」衆中が寄進したものである。

一方、三代旺心孫弟子・食行身祿(伊勢一志郡川上村農家の三男)3歳の時江戸に出て丁稚奉公、17歳の時月行の弟子となる。享保17年(1732)西日本で大規模な蝗害が起き江戸に米が入らなくなり、翌年1月江戸で高間騒動が起きると、身祿は身を捨てて神の使いになることを決意する。6月身祿は富士に入る。世のおふりかわりを願っての庶民済度、世直しを祈念し7合5勺の烏帽子岩で断食行に入り、6月13日入滅する。身祿はその際『三十一日の巻』に「正直・慈悲・情け・不足\*」を根幹とした神学的な説教の書を残している。( \*不足=貧乏に耐える。)



吉田口登山道 七合五尺にある烏帽子岩

### ●なぜ身祿の考えが庶民に受け入れられ、富士講としての繁栄をもたらしたのか？

富士行者山伏は毎日河辺に出で富士垢離を修して富士権現を遥拝する。村山では修験道が行われ聖護院の配下で西国に富士信仰を広めていた。一方角行からの流れを組む江戸で活動するもの達は修験者とは異なり、富士山を独特のセンス、線描や勝手に作った文字で表現することで霊性を表そうとした(御身抜き等に)。当時富士に登るには百日の潔斎をしなければならないとされていたが、月行の頃から7日に短縮した。行商を行い、富士登拝を続けていた身祿には受け入れ易く、厳重な潔斎をして山に登ることは負担であったろうし、内面の問題を重視した身祿には形式的な潔斎は厭うべきものであったろう。身祿は吉田口御師の宅を登拝のオりの宿舎としていたが、狂信の徒として疎まれたので田辺十郎左衛門に頼ったという消息はこの間の事情を示しているかもしれない。

富士中心の世界観においては、富士山の実在が教義の絶対的な前提であり、権威の根拠・価値の源泉として捉えられている。身祿の思想においては宗教を形式的行為から内面の問題に転換することが必要だったのである。

一般にもっとも説得力のある救済観は現世利益であると言ってよい。殆ど全ての宗教が現世利益を伴っているし、前近代的宗教になればなる程この傾向が激しい。富士講もその例外でなく、吉凶を占う「焚上げ」や病に効験のある「おあか」「おふせぎ」等々がその活動の中心をなしていた。

## 6.富士講のその後と発展

### ●神格化されていく食行身禄

初代田辺十郎右衛門は、富士山八合目で水売りをしていたとされる。食行身禄が享保18年(1733)に烏帽子岩で入定するため31日間の断食をした際に、その介添えをする。

十郎右衛門は身禄が毎日語る教えを書き留め、身禄の入定後に「三十一日の巻」としてまとめ、身禄の遺品も引き継ぐとともに、御師株を手に入れ、御師になる。

遺物の拝礼を望んだ多くの富士講社を、自らの檀家とし、新興の御師ではあったが、急速にその勢力を伸ばしていった。

身禄との関わりを持った江戸の三人の人物

身禄の入定に関わったのが、身禄が江戸で活動していた頃からつながりのある小泉文六郎、岩田小太郎、永田長四郎だった。身禄の理解者であり信奉者でもある彼等は入滅後も身禄の家族を助け、各々が教えを広めていくことになる。

### ●身禄が残した三人の娘

身禄には三人の娘がおり、主に二女万、三女花がその教えの継承を行う。特に花は今日知られる身禄の実像や富士講の教義を解明した小谷三志につながる道筋をつくった。

### ●富士講最初の富士塚

身禄直系の弟子とされている一人に安永8年(1779)「富士のうつし」として人造富士「高田富士」を造った植木屋高田藤四郎(日行青山)がいる。藤四郎は高田の水稻荷の境内(宝泉寺別当)に、信徒の協力を得て、溶岩を山麓から採集、相模川を船で下り、三浦半島をまわって江戸湾に入り、神田川をさかのぼって揚場河岸に着き、ここから大八車で戸塚村まで運んだ。(現移築先、甘泉園公園横)

これを契機に以後富士講の発展と共に各地に富士塚が造られるようになる。

食行身禄を世に生かした真の男ー小谷三志

18世紀後半鳩ヶ谷で「丸鳩講」という一大講社を率いていた小谷三志は身禄の直系三女花の弟子参行禄王と出会う。小谷は他の先達と同様にお焚き上げや吉凶の占いをやっていた。しかし身禄の教典を受け継ぎ、丸鳩講の組織を従来の富士講と区別するために「不二道(不二講)」と称し、身禄の真の教えを伝承した。

「不二道」に「振り替り」という思想がある。世界には陰と陽で構成されるが、これを逆転させることで富士山の神が望む社会変革があるとする。その端的な例が男尊女卑の逆転で、出産能力を備えた女性こそが尊いという考えがある。その実践が女性初の富士登頂をサポートしたり、富士塚を造る代りに「土持ち」という奉仕活動を行うといったことを行った。

### ●尊徳の考え(報徳仕法)と不二講(小谷三志)の考えの違い

不二道は、富士山信仰を実践道徳と結び付けた。呪術的要素は不要で家業精励・質素勤勉・勤劳奉仕・夫婦和合に努めることが富士山の神に報いる『行』であり、より良い社会の実現につながると考えた。この実践が新しい世界を招来するという点において、尊徳の教えと共通の基盤を持った。

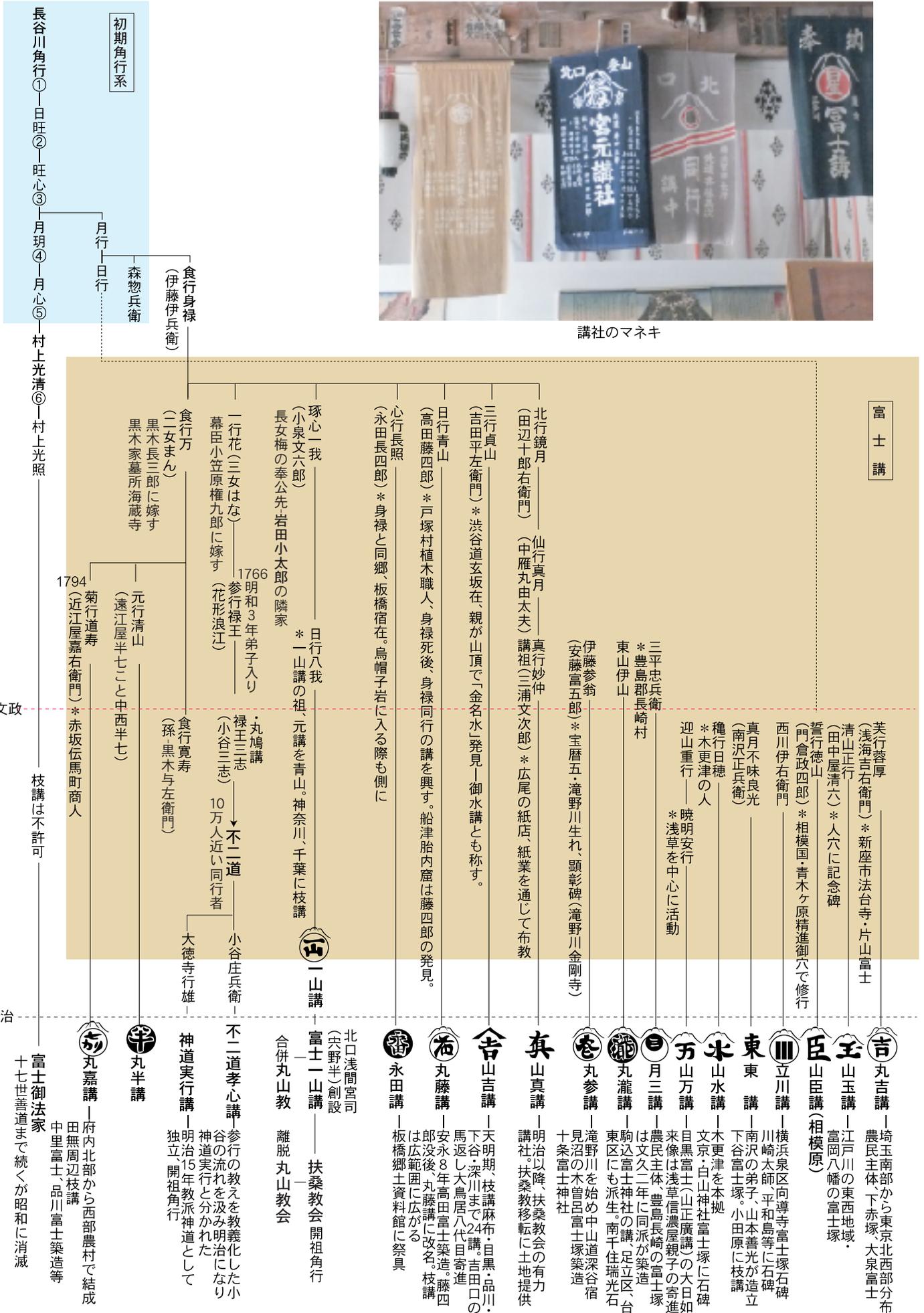
しかし尊徳の教えと異なることは、不二道では、人々が「真のひと」になりさえすれば、理想の世界が一挙にやってくると考える。そもそも現状の社会制度を変革しようという視点がない。すなわち現実に対する長期的計画の取り組みがない。

一つ一つの実践は社会的にも評判になり、それはそれとして意義が多いが、それはいわば1回限りのもので、その積み重ねが新しい状況を生み出すというステップがない。ここが尊徳と不二道仲間の考えが違うところだ。

角行系系譜 身祿を祖とする富士講の流れ



講社のマネキ



## 富士山歴史年表(1)

元号年	西暦	出来事	備考
考安92年頃	BC300年代頃	考安天皇の代、庚申年に富士山が初めて出現したと言う伝承	後に庚申の御縁年
垂仁3年	BC7年	浅間大神を山宮浅間神社の地に祀り、山霊を鎮める。浅間大社の起源	
飛鳥時代			
推古6年	598年	聖徳太子が馬に乗り、富士山を登るとの伝説	593年 聖徳太子が摂政
天武9年頃	680年頃	富士登山の始祖・役小角が、小御岳から山頂に登ったと伝わる	676年 新羅朝鮮半島を統一
奈良時代			
養老2年頃	720年頃	山部赤人、高橋虫麻呂らが歌を読む(万葉集)	
天応元年	781年	8月、富士山大噴火(続日本紀)	784年 長岡京に遷都
延暦7年	788年	北口本宮富士浅間神社が創建	最澄、比叡山延暦寺創建
平安時代			
延暦21年	802年	噴火。山頂から火山弾・火山灰が降り注ぐ。須走の小富士誕生	804年 空海唐に渡航
大同元年	806年	坂上田村麻呂が大宮に社殿を造営。浅間大神を山宮より遷座。富士山本宮浅間大社を創建。	最澄天台宗、空海真言宗開く
大同2年	807年	東口富士浅間神社を創建。	
大同3年	808年	空海が須山登山道に光明寺を創建。この頃、須山口登山道が存在？。	
貞観6～8年	864～66年	北西山腹で貞観大噴火。せの海を分断して富士五湖に？	(日本三代実録)
貞観7年	865年	噴火を鎮めるために河口浅間神社を創建。	
貞観17年	875年	都良香『富士山記』に富士山の姿を書く	
延喜7年	907年	駿河富士明神が従二位を授かる	
承平2年	932年	噴火。富士大宮浅間神社が消失。	
承平7年	937年	現・河口湖5合目に小御岳神社創建	934年 平将門の乱終結
天徳2年	958年	吉田口2合目富士御室浅間神社・里宮が河口湖畔の勝山に建立	
天元4年	981年	平兼盛が須山浅間神社を修理	
		この間噴火多発	
延久元年	1069年	現存する最古の富士山の絵『聖徳太子絵伝』が製作	
久安5年	1149年	末代上人が富士山で修行し、山頂の奥宮の位置に大日寺を創建	
鎌倉時代			
建久4年	1193年	泉瑞で源頼朝が巻狩りの時に鞭で岩を打ち、水が湧いたと伝承	曾我兄弟の仇討ち
承久年間	1219～23年	末代上人が富士山頂に經典を埋納する	1222年、承久の乱
貞応2年	1223年	北条義時が北口本宮浅間神社に東宮本殿を浅間本社として創建。	
安貞2年	1228年	親鸞上人が甲州側より登山	
正嘉3年	1259年	南口村山の寺に大日如来坐像を奉納。	
文永6年	1269年	日蓮が吉田口5合5勺に經典を埋納。後にここは経ヶ岳と呼ばれる。	1274年文永の役(蒙古来襲)
1269年	元弘元年	1274年、文永の役(蒙古来襲)	
元弘元年	1331年	地震により山頂崩壊する。(太平記)	元弘の変
室町時代			
文明10年	1478年	南口村山に大日如来坐像を奉納。	1477年、応仁の乱終結
文明13年	1481年	南口村山に不動明王像を奉納。	
延徳2年	1490年	山頂・剣ヶ峰に大日鉄像が奉納。	鎌倉大仏殿が津波で倒壊
明応4年	1495年	山頂・大日堂に大日鉄像が奉納。	
文亀3年	1503年	山頂・釈迦の割石に大日懸鏡が奉納。	
大永8年	1528年	山頂・東麓ノ河原に大日如来が奉納。	1524年、江戸城北条氏に
天文21年	1552年	今川義元、村山三坊に社領を与え、東西に見附を設置。	
永禄4年	1561年	武田信玄が川中島戦勝祈願に、浅間本社現在の社殿を新たに造営。	4回目・川中島の戦い
安土桃山時代			
天正年間	1573～92年	長谷川角行人穴修行を続け北口入山。登山百数十回、中道めぐり33回苦行	1573年室町幕府滅ぶ
文禄3年	1594年	北口本宮浅間神社の西宮本殿が建立。	
江戸時代			
慶長9年	1604年	徳川家康が浅間大社の本殿造営に着手。	五街道の整備
慶長11年	1606年	浅間大社の本殿が完成。	
慶長12年	1607年	河口浅間神社本殿再建。	
慶長17年	1612年	富士御室浅間神社の本殿吉田口2合目に建立。富士山中現存最古。	

## 富士山歴史年表(2)

元号年	西暦	出来事	備考
元和元年	1615年	北口本宮浅間神社の本殿が建立。	大阪夏の陣
正保3年	1646年	角行が人穴の洞窟で死去(享年106歳)	
		人穴口登山道が開通。富士信仰信者の登山道	
元禄12年	1700年	噴火。斜面に小型爆裂火口が誕生。(日本災異志)	1703年元禄大地震
宝永4年	1707年	12月16日、須山口登山道で宝永噴火。須山口登山道は廃道。	10月宝永大地震
宝永5年	1708年	全国に救済・復興費用を賦課。駿河・相模の被災地の一部を幕府直轄化。	
享保12年	1727年	福田履軒が初めて吉原から標高を三角測量、3847.5mと算出。	
享保18年	1733年	食行身禄が烏帽子岩で断食入定、即身仏になる。	享保の打ちこわし
享保19年～元文4年		角行系6世・村上光清北口本宮の社殿大造営	
寛保2年	1742年	富士講の活動に制限の町触れ『御水』(山頂金明水・銀明水)の禁止	
宝暦10年	1760年	池大雅が登山し、白山・立山を含む『三岳紀行図』を製作。	
安永4年	1775年	富士講に禁令の町触れ。大宮口と須走口が山頂の権力争い。	
		花形浪江、身禄跡目を継ぎ伊藤伊兵衛襲名。行名、参行	
安永8年	1779年	食行身禄の弟子・高田藤四郎が戸塚村(新宿区高田)に富士塚を開山。	伊豆大島三原山が大噴火
		幕府、8合以上は浅間神社の大宮大社社有との裁決。	1783年、浅間山噴火
寛政元年	1789	一行はな(食行三女)66歳 没	
寛政7年	1795年	富士講に禁令の町触れ。小泉壇山『富士山真状』頂上図を描く。	
寛政9年	1797年	富士講に禁令の町触れ。	
寛政11年	1799年	契沖『富士百首』出版。	江戸前期国学者、真言宗僧
享和2年	1802年	富士講に禁令の町触れ。	
享和3年	1803年	伊能忠敬が標高を測量、3928mとする。	
文化2年	1805年	富士講に「船道中の件」の町触れ。	
文化3年	1806年	富士山本宮浅間大社御鎮座1000年。	
文化4年～文政12年		江戸八百八講と言われるほど富士講が普及し、北口が栄える。二女まん没	
文化11年	1814年	富士講に禁令の町触れ。	
文政5年	1822年	十返舎一九「大山廻り富士詣」出版。	
文政6年	1823年	須山浅間神社の本社が再建。富士講に「甲州道中の件」の町触れ。	
文政9年	1826年	シーボルトが富士川で山頂高度角を測定、8度44分と算出。	
天保3年	1832年	高山たつが女性で初めて登頂。葛飾北斎『富嶽三十六景』。	
天保13年	1842年	富士講に禁令の町触れ。	
嘉永2年	1849年	富士講の完全禁止。江戸郊外までまん延した富士講を国禁として	
		弾圧。吉田の角行社や7合目弥勒堂を打壊し令を出す。邪宗との断。	
安政7年	1860年	イギリス公使オールコックが外国人で初登頂。標高4322m観測。	桜田門外の変
		徳川幕府の裁許で、8合目から上を浅間大社の境内と認める。	
慶応2年	1867年	イギリス公使夫人パークス夫人が外国人女性で初登頂。	大政奉還
明治時代			
明治元年	1868年	神仏分離令により廃仏毀釈が始まる。明治維新	
明治4年	1871年	政府により御師制度を廃止。廃藩置県	
明治5年	1872年	3月、女性の登山を解禁される。	新橋～横浜間の鉄道開業
明治6年	1873年	山頂の大日堂に変わり、浅間大社奥宮が祀られる。	太陽暦導入
		北口浅間神社宮司・穴野半が代表となり富士一山講社(後に扶桑教)を興す。登戸で丸山教興る。	
明治7年	1874年	廃仏毀釈により、山中の仏像・仏具破棄される。	
明治8年	1875年	富士山の仏教的地名が改名される。富士一山講社と丸山教合併、扶桑教会と改称	
明治9年	1876年	小御岳神社の本殿・拜殿が再建。	
明治18年	1885年	丸山教が扶桑教から独立丸山教会に	
明治22年	1889年	東海道線御殿場駅が開設、須山口登山道は衰退していく。	鉄道中央線開通
明治23年	1890年	日本アルプスの父、W・ウェストンが登頂。	
明治28年	1895年	剣が峰に観測所用建物を建設。初めての冬季気象観測を開始。	
明治36年	1903年	大月-上吉田間に馬車鉄道開通。御殿場口・須走口の登山客が奪われる。富士登山はレジャー化へ。	
昭和5年	1930年	富士山頂コノシロ池付近の岩陰より多量の埋納経の残骸発見。「末代聖人」と記す紙片あり。	
		第二次大戦後富士講は衰退。講員の数が減り東京の町中で活動する姿がなくなる。	
昭和39年	1964年	富士スバルライン開業	

## 江戸時代築造富士塚一覧表

	造立年代	名称	所在地	築造講社	備考
東京都	安永8年(1779)	高田富士	戸塚村宝泉寺(新宿区)	丸藤講	古墳基盤昭和40移築
	○寛政元年(1989)	千駄ヶ谷富士	鳩森八幡神社(渋谷区)	烏帽子岩講	境内築造、現存最古
	寛政2年(1890)	鉄砲洲富士	築地鉄砲洲稲荷(中央区)	丸富士講	境内築造明治7移築
	×文化9年(1812)	丸且富士	上目黒(目黒区)	丸且講	石碑のみ
	文化11年(1814)	十条富士	十条・富士神社(北区)	丸参伊藤講	古墳基盤元和2説あり
	文化14年(1817)	音羽富士	音羽護国寺(文京区)	山護講	境内築造明治18移築
	×文政2年(1819)	目黒新富士	中目黒(目黒区)	山正広講	石碑のみ
	文政3年(1820)	深川八幡富士	富岡八幡宮(江東区)	山玉講	境内築造朴石なごり
	文政7年(1824)	千住川田富士	大川氷川神社(足立区)	丸藤千住十三夜	境内築造築造高3m
	○文政8年(1825)	中里富士	中里(清瀬市)	丸嘉講	火の花祭り
	文政9年(1826)	白山富士	小石川白山(文京区)	山水講	
	◎文政11年(1828)	下谷坂本富士	小野照崎神社(台東区)	東講	古墳基盤 東講のメッカ
	△天保4年(1833)	砂村富士	富賀岡元八幡(江東区)	山吉講	深川八幡の旧社地
	○天保5年(1934)	羽田富士	羽田神社(大田区)	木花元講	富士八海を模す
◎天保10年(1839)	江古田富士	茅原浅間神社(練馬区)	丸祓講	古墳基盤	
天保13年(1842)	東大久保富士	西向天神社(新宿区)	丸谷講	台地斜面に築造	
×天保3年(1842)	打越富士	中野(中野区)	月三講	痕跡なし	
×弘化2年(1845)	成宗富士	須賀神社(杉並区)	丸参講	惣同行の碑のみ	
△安政2年(1855)	板橋富士	氷川神社(板橋区)	永田講	古墳基盤	
◎文久2年(1862)	豊島長崎富士	椎名町(豊島区)	月三講	構造物、石碑価値あり	
慶応元年(1865)	南千住富士	素盞雄神社(荒川区)	丸龍講	古墳塚跡に築造	
	* 寛永5年(1628)	駒込富士	駒込富士神社(文京区)		古墳跡に加賀屋敷から移転
神奈川県(相模)	寛政8年(1796)	上恩田富士	桂台(横浜市青葉区)	山富講	別称「六角富士」
	文化3年(1806)	登戸富士	登戸(川崎市多摩区)	丸山講	古墳基盤
	文化5年(1808)	熊野堂富士	菅田(横浜市神奈川区)	丸金講	最勝寺裏山
	天保12年(1841)	鶴見神社富士	鶴見神社(横浜市鶴見区)	丸一山講	神社裏・富士塚観あり
	文政13年(1830)	菅田中村富士	中村(横浜市神奈川区)	丸金講	菅田公園内
	天保13年(1842)	上谷本富士	上谷本(横浜市緑区)	山真講	
	×安政元年(1854)	東本郷富士塚	東本郷(横浜市緑区)	丸青講	痕跡なし、大日如来像残存
	文久元年(1861)	小机富士塚	小机(横浜市港北区)	丸青講	小机城跡西端
神奈川県(武蔵)	文化7年(1810)	品濃富士	品濃(横浜市戸塚区)	山真講	白旗神社裏
	天保11年(1840)	岡津富士	岡津(横浜市泉区)	夕ヶカワ講	向導寺裏山・農村地域
	×弘化4年(1847)	名瀬富士	名瀬(横浜市戸塚区)	富士元一講	名瀬下公第三公園石碑のみ
	×嘉永2年(1849)		駒形神社・寺分(鎌倉市)	山真講	富士山神社・山真講の碑あり
	×万延元年(1860)	深谷富士	専念寺(横浜市戸塚区)	富士元一講	富士講石碑のみ
慶応2年(1866)	長後富士	長後駅前(藤沢市)	富士元一講	移築	
埼玉県	寛政12年(1800)	木曾呂富士	木曾呂(川口市東内野)	丸参講	見沼代用水傍、火口、胎内あり
	×文政10年(1827)	神根富士	神根(川口市)	月三講	神根小学校傍、石碑のみ
	天保2年(1831)	片山富士	片山法台寺(新座市道場)	丸吉講	丸吉講のメッカ
	安政4年(1857)		武蔵野中郷(大里郡花園村)	丸正釣鐘講	
	万延元年(1860)	青木富士塚	青木氷川神社(川口市)	月三講	
	万延元年(1860)	西宝珠花富士	宝珠花神社(北葛飾郡庄和)	丸宝講	小谷三志「三国第一山」扁額
	万延元年(1860)		甘粕(児玉郡美里村)	丸正釣鐘講	
元治2年(1865)		赤浜(大里郡寄居町)	丸正釣鐘講		

×は破却され現存しないもの △は改造され旧態を損じているもの ◎は国指定の文化財

○は都指定の文化財(但し天保5年の大田区羽田の富士塚は区指定の文化財)

\* 社伝では延文年間(1356~61)に富士塚と呼び大きな塚が存在。寛文2年(1662)の「江戸名所記」に6月には富士信仰の祭礼を行う名所として知られていた。